



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本人の宗教意識の諸相と主観的ウェルビーイング：計量的データ分析と検討〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	清水, 香基
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第14286号
Issue Date	2020-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80607
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Koki_Shimizu_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 清水 香基

学位論文題名

日本人の宗教意識の諸相と主観的ウェルビーイング

：計量的データ分析と検討

・本論文の観点と方法

本論文の目的は、2017 年 7 月に実施された「宗教と主観的ウェルビーイング（SWB）に関する調査」の探索的データ分析を通して、1)「日本人の宗教意識」の類型の提案および宗教意識を測定する尺度の開発、2) 個々人の宗教意識のあり方が個人の主観的ウェルビーイングに与える影響の検討を行うものである。具体的には、「第 I 部 宗教意識と主観的ウェルビーイングに関する先行研究と二次的データ分析による検討」において、宗教意識と SWB に関する各国での先行研究を整理するとともに、世界価値観調査や ISSP 国際比較調査といった既存データの二次分析を行った。「第 II 部 全国調査を用いた宗教と主観的ウェルビーイングの構造および関係に関する実証的分析」では、本研究で行った全国調査の分析結果をまとめ、当該領域の課題についても述べている。

・本論文の内容

本論文は全 8 章で構成されている。全体は 2 部構成であり、前半が先行研究のレビューやデータの二次分析にあてられ、後半において自前の調査データについて分析・考察を加えている。

「はじめに」では、研究の背景・対象・目的と、各章の構成を提示した。第 1 章は宗教と SWB に関する先行研究の整理にあてられ、宗教性の SWB に対する寄与を説明する諸理論をまとめるとともに、各理論に対応するかたちで展開されてきた各国の実証的調査研究を紹介している。日本の宗教研究においては、キリスト教や新宗教など自覚的な信仰心を持つ一部宗教を対象とした研究にとどまっており、広く一般人の宗教意識や宗教行動を取り上げた研究がなかったため、それを行う意義を指摘した。

第 2 章では、日本を含む総合的社会調査に基づいたデータとして世界価値観調査や ISSP 国際比較調査の 2 次データ分析から、全般的傾向として伝統的な宗教意識の衰退（世俗化）を確認した。ただし、日本の分析結果については、使用する質問項目によって結果のばらつきが大きく、既存データに収録されている宗教項目が欧米と機能的に等価な働きをする宗教意識（宗教的熱心さや信仰の有無など）を補足しているとは言い難いとされる。そのために、日本人の宗教心を構成する潜在的な要素を探るべく、3 章と 4 章において潜在変数の探索と機能的に等価な変数との関連の分析が試みられた。

第 3 章では、NHK 放送文化研究所の「日本人の宗教意識」の時系列データの 2 次分析を行い、14 個からなる宗教意識の世代間比較を行った。その結果、「伝統的な宗教の実践形態をモデルとした規範的な宗教的行動・信念」において、世代交代に伴う信じる人の割合の低下が認められ、それに代わる新たな「必ずしも特定の神や仏を必要としないが、超自然的（神秘的）な世の中の秩序を志向するという意識」が出現しつつあることが確認された。

第 4 章では、第 3 章で使用したデータを元に潜在クラス分析を行い、「墓参りの習慣」「伝統的な信心」「現世ご利益志向」「スピリチュアリティ（個人化した宗教）」「制度的な宗教意識」の 5 つに類型化し、宗教意識の尺度とすることを提案した。このうち墓参りの習慣以外は、「保守的な性規範」「政治参加や保守的な政治意識」「主観的ウェルビーイング」と正の相関関係にあることが認められたが、2 次データからの検討には限界があり、わずかな寄与しか認められなかった。

以上の先行研究のレビューと二次分析を踏まえて、第 II 部「全国調査を用いた宗教と主観的ウェルビーイングの構造および関係に関する実証的分析」がなされる。

第5章では、2017年7月に実施された「宗教と主観的ウェルビーイングに関する調査」（全国200地点の地域・市郡規模別の各層に比例配分し、住宅地図データベースから世帯を抽出した有効サンプル1200票の戸別訪問留置調査）の概要をまとめ、社会階層、健康、人間関係に関する項目はSWBと高い正の相関関係にあること、宗教に関する行動や信念を尋ねた項目も、弱いながらもSWBと正の相関関係にあることが認められた。

第6章では、第一部の二次分析で行った潜在変数の探索を行うべく、探索的データ分析に基づいて、日本人の宗教意識およびSWBの構造についての検討を行った。因子分析の結果、宗教的行動や信念はいずれも「伝統・慣習的な側面」「制度宗教的な側面」「スピリチュアルな側面」の3因子からなることが示された。SWBに関して言えば、「主観的幸福感」には近い人間関係や個人の性向が寄与することが大きく、「生活満足度」には個人の客観的な生活状況が寄与することが大きいという特徴を有していることが示された。

第7章では、宗教意識のうち「伝統・慣習的な側面」と「制度的な側面」はSWBと正の相関関係にあり、「スピリチュアルな側面」と負の相関関係にあることを確認した。ただし、SWBにより強く寄与するのは「行動」よりも「信念」であり、「行動」は「信念」を媒介することで「間接的な効果」としてSWBに影響しているとされる。また、宗教団体に所属し、かつ宗教心の高い人たちが最も高い幸福感を示す一方で、宗教心を伴わない宗教団体への所属は、むしろ幸福感を低下させる可能性があることが示された。

第8章では、本論文の主要な知見をまとめるとともに、日本の宗教研究やウェルビーイング研究における意義と今後の課題について述べられている。本論文における分析結果は、日本でも欧米諸社会と同様に、宗教意識が個々人のSWBに寄与することを指し示している。従来、日本人の宗教意識や行動はウェルビーイングとは関連しないという研究が複数あったが、今回の総合的社会調査データに基づけば、健康状態やメンタルな心理変数ほどではないが、潜在変数から構成される日本人の宗教意識がウェルビーイングに寄与しており、こうした研究は宗教意識を測定する尺度構成や分析手法にも依存していることが計量研究によって明らかにされた。今後の課題としては、特定の宗教意識や宗教行動がなぜSWBと関連するのかを因果論的モデル構成を行って検討することがあげられる。

付録には、「宗教と主観的ウェルビーイングに関する調査」の調査票と質問ごとの単純集計一覧を記載している。